

NAGOYA

trico yoshikawa

16

STORIES

作家になってかれこれ十五年になるが、河村は作家を名乗るのが恥ずかしかった。

最初のうちはそうでもなかったのだ。ひさしぶりに会った知り合いに開口一番「ねえねえ、私作家になった！」天真爛漫に告げてはいい気になっていた。だって作家だ。いずれはなりたい職業ナンバーワンではないか。だれもが隙あらば本を出したいと願っている世の中だ。でなけりゃあんだけ自費出版の会社が乱立するわけがない。

「えーっ、すごいねサインしてよ」

判で押したようなその反応が最初はうれしかった。

「えへへ、すごいでしょ。サインなんていくらでもしたげるよお」

河村は調子に乗った。それまで連絡の途絶えていた友人たちに連絡を取り、デビュー作を売りつけた（何人かの友人とはそれで音信不通になった。保険の外交やア○ウェイと同類とみなされたらしい）。それまでひたすら避けていた同級生の集まりにも小中高大とずかずか乗り込んでいって手売りまでした。両親や親戚には箱で送りつけて代金をあとでせしめた。

「えへへ、すごいでしょ」が「そんなことないよ～」と謙遜の色を帯びはじめたのはいつからだろう。「えへへ、すごいでしょ」が「そんなことないよ～」になり、「そんなことないよ～」が「つっても売れてねーし」という自虐に変わるのにさして時間はかからなかった。

だんだん河村はわかってきた。河村が作家と名乗り、「えーっ、すごいねサインしてよ」と目の色を変える人のほとんどが河村の本を読むことはない。「本を読む習慣がなくて……」と恥ずかしそうに彼らは申告するが、これをきっかけに本を読もうという発想はないんだなあと河村はがっかりする。本を読まないからこそ彼らは作家を特別なものだと思い込む。なにか高尚で深遠で難解なこと（ってなんだ？）を書いたり考えたりしている「先生」なのだと思い込む。河村の小説を一ページでも読めば、作家の中にも「先生」などと呼ぶにふさわしくない人間がいることがわかってもらえるのに。

読まないだけならまだいい。「おれも実は本を書きたいと思ってたんだ」とへたくそな小説を送りつけてくるのや、やたら敵対心を剥きだしにしてくるワナビも数多くいて閉口した。だれもが隙あらば本を出したいと思ってる世の中ではあるが、だれもが本を読みたいとは思っていないこのアンビバレンツ。

「百××樹みたいな話を書かんから売れんのだ」としたり顔で説教してくる人までいた。「おれほど本を読んでもやつはおらん」とその人は豪語していたが、よくよく聞いてみると月に一冊本を買うだけだという。少なさ、と河村は危うく口にしかけたが、にやにや笑ってその場をやりすごした（こういうとき、河村は自分という人間を心底くそだと思ふ）。河村だってそんなに読むほうではないけれど、多読アピールするならせめて月に十冊ぐらいいは言っておいてほしかった。嘘でもいいから。

編集者とどこかにいるはずの見知らぬ読者を除けば、まともに河村の本を読んでもくれるのは身内ぐらいである。ありがたいことだが、身内というのはそれはそれで厄介な読者にもなりうる。

「近所の人にあなたの本読ませたら、やっぱりお母さんの影響うけてるね、文章からDNAを感じるって言われたわ」と母からは言われた。

影響とはいったいなんだろう。河村は生まれてこのかた母が本を読んでいるところを一度も見たことがないし、ましてや母が書いた「何時にくる?」「いまどこにいる?」「牛乳買ってきて」等といった以外の、十文字以上の文章を読んだこともない。

「お母さんもこれに応募しようかと思って」と母が見せてきたのは、その筋では超がつくほど有名な自費出版の会社が設立した文学コンテストの新聞広告だった。かんべんしてくれと河村は思った。これは自費出版の会社がやってる賞で、だれが応募しても「惜しくも入賞を逃しましたがあなたの原稿には光るものがあります。ぜひわが社で出版させていただきたい。つきましては以下の口座に――」とかなんとか手紙かメールか電話だかはわからないが送り付けられてくる詐欺まがいの手口なんだと苛立ちまぎれに説明してみても、「えー、でもお母さん文才あるっていわれたしい……」母親は唇をとんがらせてなにかとDNAアピールをしようとする。

「知らんがな!」

これ以上話していたら確実にケンカになるとふんで河村はそのまま家を飛び出した。それきり一年近く、正月にさえ実家には戻らなかった。

「この登場人物って私がモデルでしょ」と妹からは言われた。

実際そのとおりだったのだが、照れくささと看破された悔しさからそうとは絶対に認めたくなくて、「んなわけねーし! 自分が小説の登場人物になれるほどのもんだと思ってんの? どんだけずうずうしいの?」とキツイ言葉で言い負かしてベソをかかせた。河村が口で勝てるのは妹が相手のときだけである。

「いいですね、才能があるって、ほんとすごいです」

作家が言われがちな言葉ナンバーワンをあげるとしたらまちがいなくこれだ。悪気なく放たれるその言葉に河村はいつもほんのり傷つけられた。才能? 才能ってなんだ?

「ちげえし」と河村はぶっきらぼうに答える。「これは能力の一つであってなんにも特別なものなんかじゃないんだって。私には毎日同じ時間に会社に行くことなんてできないし、エクセルもワードも使えない。上司のおっさんの話を受け流すのとかマジ無理だし、飲み屋でもすぐおっさんとケンカになるしね。入社一日目でケンカして追い出されるのがオチ。社会人としていろいろ欠けてんだ――とかいうとかっこつけてるみたいだけど、そういうんでもなくてさ。うーん、なんていうか、スポイルされた結果なのかなあって……」

そういったもろもろを説明してみても、「でもそれはだれにでもできることだし、やっぱ作家って特別ですよ」とかわされる。これは接待だと河村は思う。会社で上司のおっさんにしていることをいまこの人は自分にしているんだ、と。なにがそうさせるのか? わかりきったことである。河村が「先生」だからだ。作家という肩書きは多くの人々のなにかを過剰に刺激するのだ。

「こんな話があるんだけど、小説のネタになるんじゃない?」「私の人生を小説にしたら面白いと思うんだけど」などと持ちかけてくる人もあとを絶たない。「こんなことしとったら小説に書かれちゃうかな」と目くばせしてくる人もそりゃもうたくさんいる。そういう人たちのすること

や持ちネタがおもしろかったためしはもちろんないし、そもそも彼らはなにかかんちがいしてる
と河村は思う。おもしろいから、特殊だから、変わってるから小説にするわけではないのに。

河村が小説を書くのはもっとずっと個人的な理由だった。なにか心に引っかかるものがある
から、目をそらしたくてもそらせないから書くのであって、卑近なおもしろネタなどまったく求
めてはいないのである。河村が書くのはふつうの人間ばかりだ。ふつうの、どこにでもいる、
ちょっとばかし偏っていたり歪んでいた、ときどき頓狂なことをやったりする市井の人々。

そのようなことが積もりに積もった末、河村は作家を名乗ることがしんどくなった。億劫にな
った。憂鬱になった。似合わない貸衣装を着せられているようで居心地が悪かった。なんにもち
っとも誇りに思えなくなったし、ただただ恥じるようになった。小説を書いてそれを世に出して
お金をもらってるだなんて、なんてはしたない職業だろう、とまで思うこともあった。無頼を
気取ってはいるが、河村は自分で思っているよりずっと繊細だった。

「『名古屋16話』で毎月名古屋の16区のカフェをまわる読書会やらない？ おもしろそうじゃ
ーん！」

犬町倶楽部という読書会サークルを主宰するタクヤ氏からそんな申し出があったのは、『名古
屋16話』が刊行されてすぐのことだった。

犬町倶楽部のことはなんとなくだけ知っていた。それこそ月に二十も三十も本を読んでい
そうな陰気なインテリが集まる怪しいカルト集団だと河村はずっと思っていた。しかし、主宰の
タクヤ氏は陰気なインテリが集まる怪しいカルト集団を率いる教祖様にしては、ずいぶんと陽気
なかんじで底（っていうか天井？）が知れないほど軽かった。軽さもいきすぎると禍々しさを帯
びるのだということをタクヤ氏に出会って河村は学んだ。「マグノリア」のトム・クルーズみた
いなことなんだろうか？ よくわからないがこの人は妖怪なんだろうなと河村は思った。それで
だいたいのは解決した。この人は妖怪なんだからしょうがない、というふうに。

しかしそんな陰気なインテリが集まる怪しいカルト集団の標的にされて十六ヶ月も名古屋のあ
ちこちをまわるなんて正直ごめんだった。きつととんでもない文学オタクやワナビが大挙してや
ってきてネチネチと河村の目の前で小説の瑕をあげつらい、批評家ごっこをはじめめるのだろう。
そんな針のむしろはかんべんだった。本を読まずにあれこれ言う人間もいやだったが、読み込み
まくってあれこれ言う人間はもっといやだった。ああ、そうだ認めよう。はっきり言って河村は
びびっていた。なんせ河村が口で勝てるのはこの世でただ一人だけなのだから。

「大丈夫ですよ。変わった人はいっぱいいますけど、そんなこわい人はあんまりいないですし
」

と河村を説得にかかったのは、以前から知り合いだった図書館司書のおぐちゃんだった。お
ぐちゃんは近頃ひんぱんに犬町倶楽部に入出入りしているらしい（「本の話ができる友だちが欲
しくってー」）。その時点で「陰気なインテリが集まる怪しいカルト集団」という部分に「？」
が灯りはじめた。少なくともおぐちゃんは陰気なインテリではないし、怪しいカルト集団に所属
しているようにはとても見えない。読書好きにもいろいろいるんだなと河村は己の偏見を改めた
。

「わたしもサポーターとしてお手伝いしますから！ ほかに一本釣りでもいい子集めますから！

どうか安心してきてください。たのしいですよー」

のほほんとしたかわいらしい声にからめとられ、おぐちゃんがそう言うならそうなのかな……？ と河村はあっさりその気になった。警戒心は人並みにあるし、好き嫌いも激しいのだけれど、いったん心を許すとずぶずぶになるのが河村という人間だった。それにしたって一本釣りってなに？ いい子集める？ 合コンかなにかなの……？

『名古屋16話』は河村が二年かけて地元新聞のウェブサイトに掲載していた、名古屋の16区＋周辺の地域8カ所を舞台にした短編小説集である。

「あの連載、本になる予定はないの？」

と最初に訊ねてきたのはジャンク堂書店の店長キッシーである。ジロさんが幹事をつとめるNHK（「日本放送協会」の略ではなく「名古屋の本屋さん懇親会」）の二次会（いやもしかしたら三次会？）でのことだった。

「んー、まだ決まってるーい」と河村が答えると、その場にいたコブラ社の編集者コアちゃんが「それならうちで出しましょう！」と手をあげ、うーいといとハイタッチで出版が決まったーらしいのだがべろべろに酔っぱらっていたのでよくおぼえていない（やはり三次会だったんだろうか？）。「わたしもその場にいましたよ。えっ、そんな軽いノリで決めていいの？ ってびっくりしました」とあとから下戸のおぐちゃんが教えてくれた。

とまあなんかそんなかんじで本が出て、なんやかんやでその本をオカズに読書会することになって（「オカズって言うのやめてください！」）、「名古屋16話ツアーズ！」がはじまったのは二〇一五年の十月、記念すべき第一回は中区伏見にある「NOV.CAFE」で行われた。ゆうてもそんなに集まんないだろうと高をくくっていたが、蓋をあけてみたら三十人近い参加者がやってきて河村は驚いた。

「犬町ってところはずいぶんとけったいな人らがおるんだね」

「河村さん声抑えて！」

すかさず河村をたしなめたのは、おぐちゃんが一本釣りしたサポーターのちづをちゃんだ。いつもにこにこ笑っているが、怒らせると実はいちばん怖いタイプなのではないかとひそかに河村はにらんでいる。

続々と「NOV.CAFE」に集まってきた参加者たちは、一見しただけではちっとも「陰気なインテリ」には見えなかった。男女の別なくメガネ率が高く、いかにも文化系な雰囲気醸してはいるが威圧的なかんじはしない。どことなくみな他人とコミュニケーションをとるのが不得手そうで、目が合うときこちなくほほえんでくれるのだがすぐに目をそらされる。なんか生きづらそうな人たちだなあと河村は彼らにほのかな好感をおぼえた。なんといっても彼らは全員、自分の本を読んでいるのである。

犬町倶楽部ではあらかじめ課題本を読了してきた参加者たちが七、八人ほどのグループに分かれて感想を述べあう形式をとっている。ルールはひとつだけ、「他人の意見を否定しない」。作家がゲストにきたときはテーブルをまわり、質問や疑問に答えてもらうのが通例になっているということなので、河村もそれにならうことにしたのだが、参加者たちの対応はいたってフラットだった。必要以上に河村を持ち上げることもなければくさすこともなく、ただふつうに小説を

読んできてふつうに感想を述べる。これはいったいどうしたことだろうと河村は思った。読書会やイベントで作家に触れ合う機会が多いから？ あるいはひかえめで社交ベタな彼らの性質がそうさせるのだろうか？ 河村が恐れていたような批評家気取りの文学オタクがまったくいないわけでもないけれど、彼らの理論武装はだれかを攻撃するためというよりは、世界に手をのばすための一つの方法のように河村には見えた。

その後も毎月『名古屋16話』の掲載順に各区のカフェをまわった。会場のカフェ探しに奔走したのは犬町倶楽部の副管理人であるあじわいさんだ。いつもあじわい深い顔をしてさしてあじわい深くないことを言う彼は、食への関心が高くやたらと飲食店にくわしかった（河村は彼のデータベースをひそかに「あじログ」と呼んでいる）。

北区は手打ちパスタがおいしい「coboカフェ」、中川区は店主のこだわりが随所に鏤められた「自由空間 八田」、港区では新年一発目ということもあり「ぜったいにぜったいにぜったいに餅をつきたい！」とあじわいさんが暴走し、荒子川公園で餅つきをした。東区は「撞木館」を貸し切り、あじわいさんこだわりの緑茶と和菓子でお・も・て・な・し、名東区は犬町倶楽部の定例会でおなじみの「JAZZ茶房 青猫」で作中に登場するあんぱんを特別に提供してもらい、守山区は小幡緑地公園でお花見、昭和区は作中に登場するボンボンセンターの「福わうち」でライターの大岳敏之さんといっしょに読書会っていか飲み会をした。六月には番外編として名古屋パルコの「Carlova 360」で河村の新刊の読書会を開き、緑区は有松の古民家を改装した「ゲストハウスMADO」、遊び心いっぱいの天白区「Sand Pit」はポケストップになっていてモジュールぶっさしてみんなでポケモンをつかまえた。瑞穂区は「kokokara」というキッチン付きのレンタルルームを貸し切って最初で最後のリッツパーティー！ このときは作家仲間のむうさんとコブラ社の営業うね象も遊びにきてくれて、読書会が終わってから三十人ぐらいでぞろぞろとジロさんの書店まで足を伸ばした（「店長さんかっこいい！」と犬町女子にジロさん大人気！）。ここまでくるとだんだん読書会をしてるんだかなんだかわからなくなってきたが、西区は玉子サンドが有名な「西アサヒ」、中村区はこちらも犬町倶楽部定例会でおなじみ「KAKO」のご厚意で、あのお店の海老フライサンドを持ち込むことに成功（「あじわいさん、むちゃくちゃなことするよね！」）。そして二〇一六年の締めは全身ピンクのマスターでおなじみ千種区の「グリルプランセス」で一切れ八百円のビーフカツサンドにとろけそうになった。

「残すところあと二回かあ。十六回なんて無理！ 気が遠くなる！ って最初のうちは思ってたけどなんとかかなるもんだね」

「ほんと、バタバタとたいへんだったけど、あっというまでしたね！」

「もしかしたらわたし、ツアーが終わったらロスがくるかも……って心配してるんです」

サポーターの子たちと集まって雑談していたら、いきなりおぐちゃんがそんなことを言いだし、いっせいに「わたしも！」と声があがった。

「あんたらそんなこと口が裂けてもタクヤさんの前で言ったらかんよ。『だったらもう一周やればいーじゃーん！』とかくるったこと言い出すに決まってる」

河村の忠告に、今度は悲鳴があがった。「無理！」「やめて！」「死ぬ！」みんなロスを恐れてはいるが、もう一周するのはかんべんらしい。

それにしてもツアーズロスか……と河村は想像してみる。たしかにそれは避けられないだろう。もはや日常の一部と化している感すらあるのだから。

名古屋のあちこちに足を運び、常連さんともはじめてさんとも、小説の話だけでなくいろんな話をした。毎回その区を舞台にした短編が課題作品としてフィーチャーされるのだが、こんな短い小説で時間ももつんだらうかという河村の心配は杞憂に終わった。「名古屋16話ツアーズ！」は熱く議論をかわして作品を分析するというよりは、課題本を媒介にして自分や名古屋について語る性格批評的な色合いの強い読書会だった。

河村に寄せられる質問も、技術的なことよりはストーリーや設定上のちょっとした疑問（「主人公の年齢はいくつぐらい？」「どうしてこの区はこの場所を選んだんですか？」「これは実話ですか？」等々）であることが多く、河村が調子に乗って創作上の裏話（というかぶっちゃけ話）を披露すると、「そんな話聞きたくない！」と毎回だれかしらが耳を塞いだ。ありあまるサービス精神が裏目に出たらしい。河村にはちょっと一いやかなり露悪的なところがあって、相手がぎょっとするであろう一言を思いついたら口にせずにはおれず（「ねえねえ、親のセックス見たことある？」）、そのたびにちづをちゃんがちいさな体を飛びあがらせて「河村さん！」と叫んだ。

中には術学的なことを話したがる人もいて、そういうときには舐められまいと必死こいて空っぽの抽斗を開けてみせたりしたが、だれかがなにかを言い、河村がそれに応え、別のだれかがまたかぶせる、会話がグルーブしていくときのぞくぞくするようなおもしろさは格別だった。一人では到底たどりつけない、思いもかけない場所に連れていかれる。なるほどこれが「読書会」か。河村はまったく楽器を弾けないが、即興でやるセッションはこんなかんじなのかもしれないと思った。その瞬間、年齢も性別も肩書きもどこかへ飛び去り、河村はただの河村になってそこにいた。

なにより河村は彼らのごく個人的な話を聞くのがたのしかった。「それってすごく小説っぽい！」向こうからネタを提供されたときには口が裂けても言いたくなかった台詞がぼろりと口をついて出てくることさえあった。名古屋もしくはその近郊で暮らす彼らのなんていうこともない半径五メートルの話を聞いていると、自分がこの本で書きたかったのはこういうことだったんだと改めて思い知らされた。あの窓のひとつひとつ、すれちがう大勢の一人一人にそれぞれの人生がある。あたりまえだけど忘れてしまいそうになること。街を書くということは、そこで暮らすだれかのことを書くということだった。ふつうの、どこにでもいる、ちょっとばかり偏っていたり歪んでいたたり、ときどき頓狂なことをやったりする市井の人々の物語。

「餅つきからもう一年も経ってるなんて信じられない……」

「ボンボンセンターも盛りあがってよかったよね」

「リッツパーティーのときにちづをちゃんが持ってきたマロンペーストはもはや伝説！」

なおもサポのみんなの思い出話は続いている。ツアーズも残すところあと二回となってエモくなっているのか、このところ集まるとすぐこの調子だ。「いい子集めますから」とおぐちゃんが集めてきたサポーターの子たちは実際みんないい子ばかりだった。おぐちゃん、ちづをちゃん、それから一人だけ河村が外部から引っぱりこんだアムッペ、天白区の回から参加した才女のも

あこさん。名東区の回まで手伝ってくれていたよふこさんもいる。

苦楽をともにした一年のうちに彼女たちはまるで女学生のように親しくなり、いつでも集まるとうふうふきゃっきゃしてほんとうに楽しそうである。なんだかこの子たち、一年後も二年後も、なんならおばあちゃんになってもずっとこんな話をしてそうだな……なんて想像をしたらうっかりエモくなってしまい、河村はすぐ隣に座っていたアムッペをからかって気をまぎらした。

「犬町にやってくるまで深い闇の世界で迫害されてきたけど、いまはすごく楽しい……」

なにかと重たいことを言ってみんなを爆笑させるのがこのアムッペである。いちいちツッコんでいるとキリがないのでなるべく聞き流すようにしているが、彼女はとにかく物心ついたころからDeepでDopeなオタクで、そのことをずっと自分の十字架であるように感じてたらしい（言葉のカロリーがやたら高いのはオタクだからなのか、アムッペだからなのか）。

「犬町の人たちはオタクだからってへんなレッテルを貼らないし、ちゃんと私を見てくれる感じがするっていうか……」

「おい！　そういうエモいこと言うのやめろ！」

冗談めかしてアムッペをしりぞけながら、でもほんとそうだよな、と河村は思う。

犬町倶楽部にはいろんな人がいた。若い子から年寄りまで、金を持っていそうな人から持たなさそうな人まで、社会的地位や学歴が高そうな人から底辺まで、バツイチも独身も既婚者も、セクシュアリティもさまざまで、マンガやアニメや文学だけでなく、BL、アイドル、舞台、声優、ヴィジュアル系、手芸、着物、鉄道、恐竜、歴史、美術、SM、筋トレ、グルメ、特撮、LDH……etc. この世のあらゆる種類のオタクが揃っている。それこそアムッペの言葉を借りれば、外の世界で「迫害」されている人たちがここではいきいきと泳ぎわたっているのだ。共通点は同じ本を読んでいるというただそれだけである。

一冊の本で人は裸にされる。人が裸になる瞬間を河村は何度も目撃したし、河村もそうだった。裸になった人を笑う人はここにはいない。いらぬ虚栄を張り、着衣のままにいるほうがむしろ恥ずかしいことのように河村には思えた。

長らく河村は、彼らがフラットに接してくれるのは作家馴れしているからだと思っていたが、どうもそれだけではなさそうだ。彼らはレッテルを貼られる苦痛を知っている。他人にレッテルを貼るつまらなさを知っている。そこからはみだすものを認め、愛しあう喜びを知っている。ちやほやされないことが河村はうれしかった。「作家」という肩書きは河村の一部ではあるけれどすべてではない。そのように扱われることがうれしかった。

それで河村は気づいたのだった。自分はこれまでずっと作家ぶっていたんだ、と。作家を特別視する人たちにうんざりし、どうしてフラットに接してくれないんだろうと苛立ちをおぼえながら、その実、自分がいちばん作家というものの特殊性にこだわっていた（作家という肩書きを名乗るのが恥ずかしい——だなんてなんたる自意識過剰！）。

むろん、依然としてその手のロマンチズムを作家という肩書きに託している人間はいる。作家の中にもたくさんいるし、作家になりたくてなれない人たちはとくにそうだろう。「作家はしあわせになるといい作品が書けなくなる」なんてバカみたいな言説がまかりとおっているぐら

いだ。河村自身、実際に超大物の先輩作家から言われたこともあるし、友人作家の結婚式で某社（もちろんコブラ社ではない）の担当編集者が堂々とスピーチしたのを目の当たりにしたこともある。いつも眉間に皺を寄せ、観察眼が鋭く、なにか深遠なこと（ってなんだ？）を言ったり書いたりし、破滅的で享樂的、「作家なんて人間の屑ばかりだよ」なんててらいもなく言えてしまうあの作家ぶった人たち。

そういうのはなんかもういいんじゃないかなーといま河村は思っている。少なくとも私はもういいやと思っている。呪いは解けた。ふつうの、どこにでもいる、ちょっとばかし偏っていたり歪んでいたり、ときどき頓狂なことをやったりする市井の作家が一人ぐらいいてもいいんじゃないかと思っている。そんな作家が暮らすとしたら、名古屋はどうってつけの街はないんじゃないかな、なんてことを考えている。

そうしていま河村は小説を書いている。この旅をともにした彼らに捧げる小説を書いている。河村がだれかに小説を捧げるのはこれがはじめてのことである（高校生のころ、友人にせがまれて書いた佐藤浩市との夢小説を除いて）。

「これまでの参加回数ランキングとかってかんたんに行ける？」

なんの気なしにLINEで投げかけると、ものの数十分で仕事の早いもあこさんからランキング結果が送られてきた。河村にはよくわからないのだが、過去の参加者たちはエクセルで管理されていて、なにかをちょちょっとやればすぐにランキングが出るらしい（「エクセル先生」と河村が呼ぶと、もあこさんは「やめて〜」といやそうにする。「先生」と呼ばれて河村がいやがるのとおなじようなことだろうか？）。上位には予想どおり、「名古屋16話ツアーズ！」ですっかりおなじみになった面々がそろっていた。

最終回で参加回数ランキングを発表し、上位の人にはなにか景品を、とは前々から考えていたことだったのだが、まさか小説を書くことになるなんて思ってもみなかった。できれば河村は小説なんて書きたくないのである。書かなければ金がもらえないからしかたなく書いているだけであって、一銭にもならない小説なんてだれが書くかと思っていた。その信条はおそらく河村がこの仕事を続けているかぎり変わらないだろう。

しかしいま河村は小説を書いている。みんなを驚かせたくてこっそりと一銭にもならない小説を書いている。原稿用紙十枚ぐらいでさくっと終わらせるつもりだったのにこの調子だと三十枚を超えてしまいそうで、「短い原稿だから」と校正を依頼したコブラ社の編集者バニ本亜門がぶちきれやしないかちょっと心配になっている（コアラに象にうさぎ。そう、コブラ社は動物園なのである）。

花束を贈りたい、と思ったのだ。

これまで河村は小説を書いてそれを世に出すことを、見知らぬだれかに向かって紙飛行機を飛ばすようなことだと思っていた。しっかりした骨組みの強じんな紙飛行機はどこまでも飛距離を伸ばせるし、美しく漉かれた紙で繊細に折られた紙飛行機は同じ魂を持っただれかの慰めになる。小説を書くことは、河村にとって世界に手をのばすための一つの方法だった。

けれどそうではなく、顔の見えるだれかに向かって花束を贈るのである。そんなことが小説でできると思ったことはなかったし、はたしてこれは小説なんだろうか？ 感謝を捧げるのにふさ

わしいハートウォーミングな小説を書ければよかったのだが、あまのじゃくな河村にはひゃっぺん生まれ変わっても無理な注文だった。ひどく露悪的で拙い、小説というより気分と呼んだほうがしっくりくるような代物。

二月になればこのツアーバスにたまたま乗り合わせた彼らも長い旅を終えてそれぞれの家に戻っていく。「またね」と手を振って別れる瞬間は胸がちぎれそうに別れがたくさびしいだろう。「打ち上げをしよう！」「打ち上げの打ち上げをしよう！」とずるずるやってしまうかもしれない（たぶんやる）。

だけどそれもやがて日常に飲み込まれて薄らいでいく。またどこかで再び会えたとしても、そのころには新しく刺激的ななにかに夢中でこの旅を思い返すこともない。早くそうなるといいなと河村は思っている。いつか忘れたところにひょこっとこの小説を読み返して、そのままぽいっと廃品回収に出してもらいたいなと思っている。忘れられること、忘れてしまうことを河村は恐れない。いまの気分はもうここに書いてある。だからなんにもこわくない。いま河村が恐れていることといえば、「この小説で読書会やろうよ！ おもしろそーじゃーん！」とタクヤ氏が言い出さないか、というただそれだけである。